福岡教育大学大学院教職実践専攻年報　第９号　289-301（2019）

〔資料〕

教育実践力開発コース学習会　リヒテルズ氏講話記録（要旨）
「世界の教育の動向を踏まえ，日本で，今，あなたにできること」

Naoko Richters' lecture record (summary)
- Think about trends in education around the world and Think about what you can do-

リヒテルズ直子
Naoko Richters

（要約）
坂井清隆・若木常佳
Kiyotaka SAKAI・ Tsuneka WAKAKI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻

（2019 年 1 月 31 日受理）

本稿は，教育実践力開発コースで設定した学習会における 2018 年 11 月 8 日に実施されたリヒテルズ直子氏の講話の要旨である。

学習会は，院生の視野を広げることを目的としたものである。そのため，学習会の講師には，リヒテルズ直子氏を招聘した。リヒテルズ氏は，現代の教育やそのシステムを取り巻く諸問題を取り上げた『Schools That Learn』（Peter M. Senge）を邦訳（『学習する学校』2014 英治出版），オランダでオルタナティブ教育を研究し，日本に数々の書籍を通して紹介をしている。

講話内容は，生徒の学びの基礎となるクラスルームにおける安心感の構築，「マルチプルインテリジェンス」から個々の違いを認識しそれを組み合わせてお互いに違いを尊重しそれを通して学び合うこと，ピーター・センゲが人間形成の目標としてあげる「システム市民」についての考察，OECD が掲げる Global Competence とイエナプラン教育の特性との比較，そして，日本における教育の今後の課題についてであった。

教職大学院におけるリヒテルズ氏の講話を含めた学習会の位置付け，および院生とコース教員の反応の考察は，本年報に別に投稿している「論文 教職大学院の教育内容についての検討-日本の学校教育に関する教職大学院教員と院生の意識の考察-」に記述している。本稿では，リヒテルズ氏の講話の要旨を，当日配布されたレジュメに基づいて再構成し掲載する。なお，本要旨はリヒテルズ氏の確認を経たものである。

キーワード：教育課題　イエナプラン教育　教師教育

１ 学習会の設定について

本コースでは，学校教育の課題について認識し，これに伴って求められる教師自身の役割認識や振り返りの能力について，院生の考えを深めることとともに，コース教員の未来社会を念頭に置いた教育観とこれに関連した形での自己認識，専門職者としての自覚の啓発を意図した学習会を設定した。

この学習会は，次の２つの意味を持つ。１つは，これまでの学校教育や現状を振り返り，今後の学校教育を考える上での視点を持てるようになること，もう１つは，教職大学院における次世代の学

修内容設計を考慮した改善案の準備である。本学習会に先立ち，まず，10/30 に教育実践力開発コース教員によるテキストとして採用した『学習する学校』の一部についての読書会が行われた。続いて 11/1 には院生の教育課題に対する意識を捉えるための学習会が開かれた。そして，11/8 に，３回目の会合として，院生・外部参加者・コース教員の参加のもと，リヒテルズ氏によると学習会が実施された。

２ リヒテルズ氏講話記録（要旨）

【はじめに】もともと九州大学大学院で，比較教育学を専攻し，ヨーロッパおよびアジア諸国の教育制度を学んだ。その後，博士課程で社会学を学び，アジア・アフリカ・ラテンアメリカの開発途上国に住んで，社会のあり方と学校教育の関係について学んできた。このような経験を経て，1996 年から 22 年間オランダに住んで，オランダの教育制度や社会について自主研究をしてきたが，最も気になっているのは，公教育とは何か，その最も核になる考え方は何かということである。特に，オランダが様々な意味で市民社会として成熟した 1970 年代に普及したイエナプランに出会って，これまでの伝統的な学校教育とは本質的に違うものをめざした教育があることに強く印象付けられた。イエナプランが今，日本の教育界にいる人々に問いかけているものは何なのか，参加者と共に考えていきたい。外国の教育といえば，とかく，授業方法や授業技術にばかり目が向く傾向があるが，そうではなく，イエナが目指している人間形成，すなわち教育の本質は何かという議論に立ち返りたい。

【学びの基礎−つながり感情に基づく安心感−】イエナプランの学校では，学年の初めに，およそ１ヶ月ぐらいかけて，子供達が共に遊ぶ機会を設け，安心・信頼の感情を培えるようにする。なぜならば安心・信頼こそは，個々の学びを効果的に進めるための最低条件だからだ。ここでの教員の専門性は，子どもたちがお互いに信頼感情をもって関わり合い，安心して勉強できる環境をつくることである。日本の学校では，教師が，そのような環境作りに時間をかけることなく，いきなり授業を始め，いきなり生徒たちにおとなしく耳を傾けるように指導するが，それでは，周りにいるクラスメートとの信頼や安心感は育たない。その結果，学びそのものが非効率ともなる。

子供達は，学校教育を終えた後に実社会に出ていくわけだが，そこで，他者とどのように信頼感情を育めば良いのか，学校では教師たちが，意図して，そうした能力を伸ばすような教育や環境づくりに取り組んでいない。

イエナプランの本質は，個別の子供の独自のテンポやニーズにあわせた発達を支援するということにとどまらず，子供達が，お互いに協働することを通して，他者を尊重し，他者との関係性の中で自尊感情を育てて，共に生きることを教えようとするものである。

【マルチプルインテリジェンス】（「マルチプルインテリジェンス」を使ったグループ構成の実施）

これからの学校は，１人１人の子どもを機械の歯車のように画一品として育てていくのではなくて，１人１人の個性を生かす，また，異なる個々人が協力して一人ではできない大きな成果を生む体験を重ねさせていくことが大切だ。未来社会では，これまで人間がやってきた仕事を AI が行うようになることは目に見えており，人間はむしろ，個性を伸ばされ，社会性を育まれることで，社会のより良い発展に創造的に貢献できるようになるのだと思っている。

マルチプルインテリジェンスの考え方は，子供の個性を見出すためのツールとしてとても有用である。これからの人間は，大人である私たちも含め，日本という国の中だけで生きているわけではなく，ありとあらゆる面において，世界各地の人々との関係なしには生きていけない状況にある。現在最も大きな問題は人類の住処である地球の環境破壊が進んでいるにも関わらず，世界各地において民族・宗教・文化を媒介にして紛争対立が起きていることだ。目前に迫った地球環境の問題を解決するには，違いを乗り越えて意欲的に協力する人間が必要なのである。

だが，学校は，そうした他者との協働や，共同を通して共通の問題を解決する意欲を持つ人間を育てているだろうか。そのために教育をどのように組織すれば良いかについて，教員たちは専門的に学んで知っているだろうか。

【システム市民】（５分間　宿題でピーター・センゲが『学習する学校』の一部，第一章の６と第 16 章の８のピーター・センゲ自身による論文を読んできていただいた。それについて今テーブルを囲んでいる人たち同士で，これから５分間，意見を交換してほしい。その際，リーダーを決めるとか，

順番に発言するというやり方はしないでほしい。また，発言を強制せず，言いたいという気持ちになった人から発言をしていってほしい。黙っていたい人は黙っていて構わない。黙っていても参加していないというわけではない。黙っているときは，言いたいこと，考えていることが言葉になっていない場合もある。また，主体的に，自分の方から発言することだけを認めることによって，強制されることによって生まれる，他者からの期待に合わせた発言がなくなる。

（話し合いの後で）センゲが言っている「システム市民」とは何だろう。システム市民とはどういう人のことを言うのだろうか？

（参加者の発言）

センゲはシステム理論の研究者。システム思考は，線形思考に対立する概念。学校で教えていることは，問いがあったら答えはこれだよと，物事の因果関係を単純化し，線型的に考える習慣を子供達に着けさせる傾向がある。しかし，現実の世界の本物の物事は，お互いに複雑に関わり合っている。世界の情勢や経済活動も，ある地域における変化が，直接にではなく，様々な経路を経て，全く異なる地での変化を引き起こすことがある。そうした関係性を理解するには，単純な線型思考では不可能で，システム思考を学ぶ必要がある。

人間は常に学び続ける存在だ。学校で単純化された因果関係や知識を記憶することだけでは，実際に社会で働く際に，複雑に関わり合っているホンモノの自然現象や社会事象に対して，どのように働きかけることができるのだろうか。

システム市民とは，従って，物事の複雑な関わりを探求して解きほぐし，そこから，より良い自然や社会のあり方のために，自らもシステムの中での役割を意識しながら，他者とともに創造的に取り組む人間のことだ。

【今日学んで帰りたいことは？】さて今日，参加者の皆さんは，何を学びたいと思ってここにおられるのだろうか。

（参加者が書き出す）

今ここに書かれた答えは，1 人 1 人皆違うものであると思う。学校の生徒も，求めているものは一人ひとり異なる。私はこういう人間になりたい。そのために，学校でこんなことを学びたい，と考えるはずだ。しかし，教師は，事前に，子供にはこれが必要だと決め付けたことだけを強制的に教えようとしている。

学校の先生がやらないといけないのは，子供に何かを教えるだけではなくて，子供が自分一人ででも学び続けられるようになることだ。子どもたちには，学びの楽しさと，探求的に学ぶ方法を身につけさせなければならない。

【急速に変化する世界で子どもたちが身につけるべき力とは。Global Competence】世界中の人が今悩んでいる。特に，教育関係者。社会がこれからどのように変化していくかは，私たちの誰も知らない。学校で教えている教師たちでさえ，それは知らない。そこに向けて，どんな人間像を心に描いて子どもを育てればいいのだろうか。悩んでも答えはないからと，これまで通りやっていこうと考える国と，わからないなりに，可能な限り子供達に未来社会に必要だと思われる力を想定して，これまでとは違う取り組みに努力している国と，どっちの国の子どもたちが幸せだろうか。

まず，誰かが考えたものを受け身に受け止める前に，自分自身で，急速に変化する世界で子どもたちが身に付ける力とは何かについて，考えてもらいたい。大切なのは，他者と意見を交換することで，自らの考えを深めていくことが大事。

（グループ活動）

5 人ずつのチームで話し合うことで，自分一人では思いつかなかった考えに出会えたのではないだろうか。OECD の Asian Society でも，Global Competence（グローバル時代に求められる能力）について，専門家が集まって話し合いを重ねた結果，次の 4 項目にまとめている。

1 つ目は，世界を探求する力。2 番目は，異なる観点があることを認める力。3 番目は，考えを伝達する力。4 番目はアクションを起こす力。

【イエナプランの教育】さて，ドイツで約 100 年前にペーター・ペーターゼンが創始し，オランダでも 50 年間ほどの間に多くのイエナプラン・スクールで実践されている教育は，この Global Competence のレポートに書かれていることと大変大きな重なりがある。イエナプランが目指してきた人間像は，まさに，こうした能力を持つ人間なのである。

イエナプランには，要約すると 4 つの大きな特徴があげられる。

《異年齢学級》イエナプランの第一の特徴は異年齢学級。3 学年の生徒が一つの教室で学び合う。これは，実際の社会にできるだけ類似させた状況を作っているとも言える。3 年間で，年少から年中，年長と立場が変わり，小学校にいる間にそれ

を３度経験する（オランダの小学校は４－１２歳）。いわゆる同学年の他の子供に比べて特にできる方でなくても，年少の子に教えたり手伝ったりする経験ができると自己肯定感や自尊感情を育むことができる。また，同学年の子供だけからなる学級に比べて，助けたり，助けれることが当たり前になり，他者を尊重したり協働することを学べる。

《リズミックな時間割》2 番目は，リズミカルな時間割。これは簡単に言うと，毎日の時間割を，国語・算数・理科・社会というように科目で区切るのではなく，対話，仕事，遊び，催し４つの基本活動によって展開するということだ。また，毎時限を 45 分とか 50 分というように同じ時間で区切るのではなく，その時のニーズに応じて短くしたり長くしたり柔軟に対応する。また，集中して行う仕事と，遊びや催しのようにリラックスしたり，仲間と話のできる時間を交互に入れることで，集中力を増し，気分転換をしながら学ぶことができる。

- **対話**：イエナプランスクールでは，頻繁にクラスの子供たち全員で綺麗な円形の輪を作って全員で会話する。先生も，生徒と同じように一人の人間として対話に関わる。生徒たちも，教員も平等であることがサークルによって象徴される。対話は，この他，二人組や小グループなどでも行われ，そういう対話を通して，学びを振り返ったり，お互いから学ぶ機会になったりする。
- **仕事**：イエナプランでは，勉強のことを「仕事」と呼ぶ。学校で，子供達は，課題として達成しなければならない仕事がある，という意味でもある。仕事には，自分一人でするものと，グループで共同してするものとがある。子供達は，普通は，テーブルグループと呼ばれる数人ずつの小グループのテーブルに座って勉強している。主として午前中に行われる自立学習では，それぞれ，その週に出された自分の課題を，自分の計画に沿って自習形式で進めていく。テーブルグループには年齢の違う子供たちが一緒に座っているので，学び合い，教え合いが可能だ。また，主に昼食後の午後に企画されている協働作業は，ワールドオリエンテーション（本物の題材を使った総合学習），クラス会議，音楽・図工・演劇などの表現能力を伸ばすための活動，体育などが行われる。
- **遊び**：イエナでは，遊びを，勉強の合間の休憩としては捉えておらず，遊びそのものの持つ子ども学的な意義を認めている。すなわち，子供達は，遊びを通して，強化学習で学んだ内容を実際の場面で応用したり，遊びながらワールドオリエンテーションのテーマになるような問いを発見することがあるからだ。そのため，中休みや昼休みに運動場に出て遊ぶ他にも，仕事として行われる学習の合間に教室の隅や廊下などで様々な遊具を使って遊ぶ時間が設けられている。
  また，授業中に集中力が落ちてきたり，子供達の連帯感情が薄らいでいると感じられるような時には，教員が短い遊びを取り入れて，子供達の共感を促したり，安心感を生み出したり，集中力を取り戻したりする。
- **催し**：催しとは，何かを祝うことだが，イエナプランでは，喜びだけではなく，悲しみを皆で共有する時間としても催しを尊重している。催しは，喜怒哀楽を共有し，共同体としての感情を高めるものであると言える。クリスマスや子どもたち，教員の誕生日といった年中行事の他に，学びの成果を共有する時間として，催しはクラス単位でも学校単位でも行われる。多くの学校では，毎週，週の初めの月曜日の朝や週の終わりの金曜日の午後に，全校生徒が一堂に集まって，学びの成果を演劇・歌・詩・プレゼンテーションなどにして，全校生徒と全ての教員，保護者に披露する。

《ワールドオリエンテーション》ワールドオリエンテーションは，世界に向けて子どもたちを学ばせる，という意味で，いわゆる，教科の枠を超えて総合的に学ぶ時間である。しかし，単に，理科と社会の組み合わせというようなものではなく，一定期間，共通テーマに沿って，国語・算数・英語・音楽・図工など全ての領域に渡って，ワールドオリエンテーションを行う。大切なのは，学びの対象が，現実世界の本物であること，また，生徒たちは，すでにわかっている知識を覚えるのではなく，ここで，自分の方からものに問いかけ，その問いに答えを求めるために探求するプロセスを学ぶことにある。ワールドオリエンテーションは，まさしく，探求を経ながら物事の関係性やシステムを学ぶのであり，ここでピーター・センゲがいう「システム市民」としての訓練が行われる。

先ほど，OECD4 つの Global Competence の話をしたが，それを具体的に教育として展開している学校は，たぶん今の日本にはあまりないと思う。こうしたグローバル時代の能力を養うための

学校教育へのヒントとして，イエナプランには多くの示唆があると思う。

【20 の原則】（読んだ感想を参加者でシェア）20 の原則は読んでみてわかると思うが，初めの５原則が「人」について，次の５原則が「社会」について，イエナプランが理想と考える姿を表現している。すなわち，自由を保障され，社会に対して責任を持って関わる全人格的な人間の姿と，互いの存在を尊重し合い，それを通して，自然と文化の恵みを次世代に継承する社会である。そして，最後の 10 原則は，こうした人と社会の理想の姿を目指して学校を組織していくにはどうすれば良いかをまとめたものだ。これまでの学校が求めていた人間の姿，社会のあり方は，ここで描かれているものに比べてどのようなものであったか。そこから解き明かしていかなければ，学校教育のあり方を考えることはできない。

【コア・クオリティ】（感想を参加者でシェア）

コア・クオリティは，2000 年代に入って，新しい時代に求められる能力として，オランダのイエナプラン教育協会が新たに掲げたものである。このコア・クオリティは３つの部分から成り，最初は「自分との関係」。自分自身の得意・不得意を知り，自分自身を尊重しながら，不得意な部分をより高めていこうとするということである。誰しも「こうなりたい自分」という理想像と現状としての今の自分というのがある。問題は，今の自分をあるがままに受け入れ，そこから，自分が目指す理想の姿に向けて学びを始められるかどうかにある。それが「自分との関係」を築くということだ。

次は，「他者との関係」。他者の存在価値は「自分」の価値が分かっているときに初めて認められるものだ。逆に，他者の強さや弱さがわかることで，自分自身の存在の価値も見えてくる。つまり，自分との関係と他者との関係は，相互補完的なものだということだ。

コア・クオリティの３番目は，「世界との関係」を学ぶというもの。自分は，この世界で何ができ，世界に対してどういう意味を持てるのか。他者はこの世界に対して何ができどういう意味を持てるのか。実を言うと，世界という文脈のないところで，つまり，生きた現実の社会という前提のないところで，自分や他者の存在の意味は知ることができないものなのである。現実世界における意味がなくて，ただ単に国語ができる，計算能力があるということでは，子供達に学ぶことの意味を教えることはできない。

この３つのこと，すなわち，自分，他者，世界との関係を学ぶために，イエナプランでは，常に年齢や性別や個性の異なる他者とともに学ぶ機会を与え，教科書に書かれた抽象的な題材ではなく，本物の生きた題材をテーマとして探求学習を進めるのである。

教科書を開いて，そこにある写真を見ながら「アフリカの難民がこれだけいます，あなたはどうしますか？」と問いかけ，子供が「募金します」と答えたら褒める，というような，そんな話ではないのだ。生きた現実に目を開かせ，生徒たちに，自分にはどんなアクションが起こせるか，と考えさせる，クラスの仲間全員だったら何ができるだろうか，学校全部で何かできないか，それを子供たちの話し合いの中から生み出していく。コア・クオリティに基づいて指導するとは，そういうことだ。

【７つのエッセンス】7 つのエッセンス，これはイエナプランが子どもたちに身につけさせたい能力として目指している７つの領域。人間の本当の力はテストでは測れないところにたくさんある。教師の目をそこに向けようとしているのが，7 つのエッセンスと考えてもよいだろう。

7 つのエッセンスは特に順番があるわけではなく，それぞれの子どもが，今どんなことができていてどんなことはまだ学ばなければならないのかを見出すための枠組みである。

同時に，教員自身も自分の強みや弱さを知っておくことが大切。学校は，教職員チームによって運営されるもので，お互いの良さを認め，自分が苦手なところは他者に助けを求め，力を借りるような関係ができると良い。そのために，この７つのエッセンスを，お互いの強さや弱みを理解する枠組みとして使うことも可能だろう。

そう考えると，日本の学校の現状は，改善の余地が大きいと思われる。上からの管理と頻繁な異動のために，教職員チームを作るということが難しい。しかし，学校を子供達と大人が作る共同体と考えるイエナプランでは，教職員チームの連帯は，何よりも重要だ。

【authenticity】authenticity という言葉がある。これは，ホンモノ性という意味で，人間のあり方という観点からすると，「自分らしさ」とか，「ホンネでいる」というような意味になる。教師だって，人間である以上，いつも張り切ってニコニコ

しているというわけにもいかないだろう。教師が，「教師としてあるべき姿」を求めて本来の自分とは異なる「教師」“らしさ”を演じることが，子どもたちにとってどれだけ苦しいものであるか。先生があまりにも先生らしくしようとするから，子どもたちも自分らしくできなくなるないのではないか。先生は，まず何よりも，一人一人の子供を自分と同じ価値のある人格を持った存在として受け入れること，そして，自分も，子供に対してありのままの姿でホンネで関わること，それがauthenticityの意味だ。

子どもというものは，時として，深く難しい質問をすることがある。そして，教師は，子供の質問に答えられないことで自分の権威が失われることを恐れ，「わからない」と言えず，ついありきたりの答えを言ったりわかっているふりをすることがしばしばある。しかし，子どもが質問をして自分にも答えられない時には，「わからない」と率直に言えることが大事なのだ。その時にこそ，子どもは，先生も知らないんだ，じゃあ自分で調べよう」と，探求意欲を湧かせるものだ。教師の本当の専門性とは，子供を刺激し，自分から学ぼう，学びたいという意欲を湧かせることだ。そして，教師もまた，知らない，わからないことに直面したら，自ら探求し，自分を向上させる。その姿が，子供にとって最も重要なものなのである。

【子ども一人ひとりの個性を尊重するために】さて，次にみなさんにやっていただく課題だが，みなさんは，「子ども一人ひとりの個性を尊重するために具体的に今何をしているか」という質問だ。まだ学生や院生の方は，あまりそういう経験がないかもしれないので，「尊重するために今後，学校で，具体的に何をしようと思うか？」でもいい。まずそれぞれ自分だけで考えて，次の3分間で意見交換をしてほしい。子どもの一人一人の個性を尊重するために，あなた自身は具体的に何をしているか，具体的にどんなことをしているか。ただ，「あなたは子供の個性を尊重してますか？」と聞けば，「尊重しています」と皆答えるだろう。だが「では，尊重するために具体的に何をしていますか？」と聞くと，答えはなかなか出てこないものだ。実際に，具体的な手段として何をしているだろうか。

（参加者の話し合い）

話し合いはどう進んだだろうか。では次に，「複数の子どもたちが協働によって成果を得る経験，つまり能力や性格の異なる子どもたちがその違いを利用して共同で成果をあげるという経験，何か今までの経験でのそういうものがあるかどうか，考えてほしい。まずそれぞれ自分だけで2分間考えて，そのあと3分で，グループのメンバーと話し合ってほしい。

（参加者の話し合い）

話し合いの時間もそろそろ終わるが，今様子を見ていると，どのグループも意見交換が止まらなくなってしまっているように見受けられる。これが，アクティブラーニングなのだ。このような状況を生徒たちの間に生み出すのが，教員の能力として求められる。現実に，私自身は，今何もしていないが，どのテーブルでも話し合いがどんどん進み，お互いから多くを学んでいる状況だ。こういう状況を教室の中で，沢山生み出してもらいたい。

学校や教室で，何か，話題にして話し合ったほうがいいと思われることが起きたら，サークルを作って全員で話し合う。サークル対話を通して，一人一人の子どもは，自らを発見した者を発見するのだ。教員が，教室で，子供達の学びのための枠組みを作るとは，こういうことなのである。先生が，一方的に規則を押し付けたり，自分が正しいと思うことを説明するのではなく，子ども自身が自分の頭で考え，お互いの知恵を寄せ合って，自分たちで納得のいくルールを決めたり，こうしていこう，と意思決定をしていく経験こそが大事なのだ。

それは，子どもたちが持っている力を信頼するということでもある。イエナプランは信頼の教育だ。これまでの産業型社会時代の，子どもたちを皆，四角に固めていくような学校教育は，不信の教育だ。子どもたちの力を信じておらず，規則がなければ悪いことをする，という前提でやっている。大人がしつけなければいけないという前提なので，信頼のない，不信の教育になってしまう。イエナプランは，子どもたちが，持っている力を引き出し，一人一人に自分の力を信じさせ，お互いを尊重し合うことを教える。それは，子供達の力への信頼がなければできない。こうした子供の中に潜在的にある内発的な力を引き出すことで，様々な未知の課題を乗り越えていく自信や共同への意欲が生まれるのだ。先生から言われたことだけしかやらない子どもは，未来社会を，どうやって自分で切り開き，若い世代のために引っ張っていくことができるだろうか。マイノリティの人たちも含め，お互いに理解し合うことによって，それぞれ，自分の立場からだけでは見えなかった新

しい観点が見え，課題をクリエイティブに解決する方法が見えてくる。民主主義とは，本来，そうした力によって支えられるものだ。

今，欧米で民主主義の危機という話題が頻繁に聞かれる。根拠のない発言をして大衆の人気を集めるリーダーが票を集め，本来の民主主義に必要な，時間をかけた意見交換や根拠に基づいた議論がなくなり，マスメディアからの情報にも信憑性が疑われるものが跋扈する時代だ。しかし民主制という統治体制は，やはり，現在までに歴史上生まれた統治体制の中で，最も理想的なものであることには疑いはない。また，この体制が，国の中だけではなく，今，世界規模で求められている。つまり，これから，グローバル社会に向けて育っていく子供達には，各々の土地における条件に基づいて，一人一人がどう生き，どんな社会を作っていきたいと思っているのか，また，それは，世界の他地域の人々にどんな影響を及ぼすものであるのか，さらに逆に，他地域の人々の生き方が，自分たちの生活条件にどんな影響をもたらしているのか，そういったことを，自分自身の目で確認し，根拠を持って他者に伝えられる能力を持っていてほしいと思う。それは，突き詰めて言えば，世界の人々が，共に力を合わせ，お互いの生存条件を傷つけ合うことなく，地球環境を取り戻していくために他ならない。

民主主義は多数決ではない。民主主義は，むしろ，マイノリティの人々の声に耳を傾けることだ。権力のない人，権威のない人たちが，どう考え，どう生きたいのかに耳を傾けることが，本来の民主主義の中核的価値観だ。

【変わらなければならないのは？】産業化社会型の学校教育を，地球市民育成型の教育に変える上で，最も変わらなければいけないのは，実は先生たちである。これまで生徒に「教える」「知識を伝える」と考えてきた教師たちは，生徒が自発的・意欲的に「学ぶ」ようにするにはどうしたら良いかと，自らを振り返る必要がある。オランダにイエナプランが紹介された時，当時の学校の先生たちも大変驚いた。こういう教え方があったのだと。その後，イエナプランは，オランダの教育政策に大きな影響を及ぼし，1981 年の新初等教育法の編纂にも影響を与えた。そして，この時に，教員研修，特に現職の先生たちの研修が始まった。つまり，それまでの常識とは異なる，子供達に対する新しい指導の仕方を学ぶチャンスが，すべての先生に与えられるようになった。現在，パートタイムかフルタイムかの別なく，全ての現職教員には，年間，1 人あたり約 10 万円の研修費が出ている。20 人の先生が働いている学校では，1 年間に 200 万円程度の研修日があるということだ。この研修費を使って，外部の専門の指導者から，指導を受けることができる。その中には，授業方法だけではなく，学校職員のチームづくり，学校経営に関わるものもある。

他方，教員が変わるためには，校長先生も変わらなくてはいけない。教員が生徒を信じるように，校長先生も教職員の力を信じ，自分で考え工夫する余地を生み出すことが大事だ。管理ではなく，リーダーシップを持っていること，それが校長先生の役割だ。

現実に新学習指導要領を見てみると，文科省は，良いことも沢山盛り込んでおり，その範囲内でやれることも沢山あると思う。以前，前川喜平さんと対談したが，前川さんも，実はまだまだ現代の制度環境の中でもやれることが沢山あるはずだが，学校の教職員の方が，小さくなってしまっている，と言うようなことを言っておられた。私もそう思っている。現場の若い先生や若い学生たちは，色々な場で，教育についての新しい考え方を学んでいるにも関わらず，学校の中ではそれをやりにくい雰囲気がある。一番問題が大きいのは，県や市の教育委員会など，地方の教育行政で，その末端にいるのが校長先生ではないか。本来，校長先生は，自校の教職員に睨みを向けるのではなく，睨みを行政に向けて，教職員たちの自由な活動を守ってほしい。そんなことを押し付けられたのでは，学校経営はできない，そんな厳しい管理をしたら，教師たちが自由に工夫できなくなるじゃないか，ロボットにしかできないような教育を人間である教師がしていてどうするのか，と。そう言える校長先生が 1 人でも増えると，日本の教育もずいぶん変わって来るのではないか。

もちろん制度も変わらなくてはいけないけれど，制度を変える力は，実は，政府にではなく，市民にある。それが民主主義だ。市民である私達が説得力のある声を上げると，政府も無視はできないはずだ。そのためには，エビデンスを見せていくしかない。

また，今の日本では，学校の先生と保護者とが対立している状況がある。子どもたちが唯一接している大人たちが対立しているというこのような状況は，子供達にとってとても希望のない状況だ。教師や保護者こそ，未来社会に子供を送り出す大人として，利害の違い，価値観の違いを乗り越え

てお互いの声に耳を傾け，協力していかなければならないのではないだろうか。。

このような話をすると，必ず「社会がダメだから学校もダメだ」という話になるが，それでは，いつまでたっても拉致があかない。学校そのものに，保護者や地域の人々を引き込み，学校で小さな理想社会を先取りして実現することで，子供と共に大人たちが変わっていくきっかけになる。

【子どもが主体的に学ぶ，学びの当事者意識 ownership を持つために】子どもたちが，学びは自分のためにしているのであり，先生に言われたからするのではないと考えるようになること，また，学校は自分たちの社会で，自分たちの責任で，自分たちが理想と考える社会にしていくのだ，と考えられるようにする，つまり，学びのOwnership，学びについて当事者意識を持てるようにするには，教師や校長は，何を積極的にして，何をやめたほうが良いのか，について考えてほしい。（次のページに記入）

【官僚的文化から専門者集団的文化へ】配布資料の中に，「官僚的文化から専門者集団的文化へ」というページがある。インクルーシブで民主的な学校文化を作るために，教職員は自分を振り返って，できるだけ，左側の官僚的文化から離脱し，専門者集団らしい文化を生み出していく必要がある。左側の官僚的という言葉は，英語では，bureaucratic という言葉で，bureau は机，事務机のことだ。

今の日本の学校の職員室は，どこに行ってもほとんど，灰色の机が背中合わせに並べられ，それぞれの机には書類が山のように積まれ，他の人と話もできない，したくないという様子がありありと見える。また，官僚的文化では，何か問題が起きた時に，責任の所在を追求しようとする。それに対して，専門者的集団文化では，皆が，それぞれの責任を自覚しつつ，他者の失敗を追求するのではなく，お互いに手を伸ばして，他者と共に協力して，子供達が学びや学校生活に対して当事者意識を持って関われる環境を作ることに専念する。

この表を使い，右と左と比較しながら，自分自身を振り返り，真ん中の１から 10 のスケールを使って，自分はどの程度できているのかを記入してみてほしい。こうすることで，自分のどこを変えて向上させていかなければならないかが見えてくると思う。

【スース・フロイデンタールの〈８つのミニマム条件〉】元々イエナプランはイエナという名前からも分かる通り，ドイツのイエナという都市にある大学の教授だったペーター・ペーターゼンが，大学に附属していた実験校で試み，1926 年に「小さなイエナプラン」という本の中で発表したものだ。しかし，様々な事情で，ドイツではあまり普及せず，1950 年代に「小さないえば」に出会ったオランダ人スース・フロイデンタールという女性によって 1960 年代以降オランダで広く普及していった。

1960 年代後半は，オランダだけではなく，イギリス，フランス，アメリカ，ドイツなど，欧米先進諸国で学生運動・反核運動運動・機会均等運動・女性解放運動などが起き，本当の意味で，市民社会のあり方が問われ，社会意識が大きく転換した時代だ。そのような時代に，スース・フロイデンタールが伝えようとしていたイエナプランは，若い教員や保護者に「新しい教育のあり方」を差ししめるものとして映った。当時，画一教育のために留年する子どもが多数いることについて，解決を求めて，文科省が研究報告書を書かせているが，その報告書の中で，当時話題になっていたイエナプランとモンテッソーリ教育が異年齢学級であることに目をつけた。それが，この時期のオランダでイエナプランを普及させる上で，一つの大きなきっかけになったと言われている

1970 年代に，イエナプランの数は一気に増え，約 200 校にまで数が増えている。その時に，フロイデンタールは，イエナプランの本質とはなんなのか，何が，イエナプランの最も大切な価値観であるのか，を「８つのミニマム」という形にまとめた。つまり，ペーターゼンの考え方を使って，様々な学校教育を実践することは可能だが，最低限，何を核に据えて理想と考え，それに向かって努力し続けなければならないか，ということだ。

その「8 つのミニマム」について見てみよう。まず第１に，インクルーシブな考え方。世の中には，様々な人々が暮らしている。「どの人も排除することなく，共に生きていく」学校も，できるだけ社会の姿を反映するように，様々な人たちを受容していくべきだ，ということだ。２番目は，「対話の尊重」。これははじめに言ったように，サークル対話を始め，常に，他者との対話で振り返り，他者を尊重することだ。ソクラテスの時代から人は対話を通して学ぶということが言われている。でも，今の日本の学校にどれだけ対話があるだろうか？また，ホンモノを題材とした学びはどうだ

ろうか？　先ほど触れたauthenticityのことを言っている。それから，批判的思考。これは，自分の頭で考えるということ。他の誰からの強制も受けずに，自分の頭で，自由に思考をするということ。

オランダのイエナプラン協会の会報誌はMensen-kinderen という名前だ。kinderen はchildren のこと，mensen とは人間という意味。つまり，Human-children，人間としての子供，という意味だ。子どもを機械の歯車ではなく，人間として育てようという姿勢を示している。そのために，学校は人間的で民主的な場でなければならない。子育てを人間化する。つまり，国語・算数・理科・社会といった教科ごとのスキルと知識を学ぶ，すなわち「認知的な発達」にとどまらず，ペスタロッチの言う，頭と心と手による発達，感情や社会性の発達，技術や芸術を通した表現力の発達，などがバランスよく行われるようにすることだ。

自由ということも８つのミニマムの一つに挙げられている。自由には色々な意味があるが，子どもたちの自由だけではなく，先生の自由も重要だ。また，学校も，外部のいかなる団体によっても影響を受けない独立で自由が存在でなくてはいけない。

そして最後にクリエイティビティ，つまり，何かを創造し生み出す力のことだ。何か問題が起きた時には，まず過去の経験から解決法を探ろうとする。しかし，それだけでは足りないこともよくある。柔軟な思考や他者との協力で，新しい解決法を生み出すことができる。それがクリエイティビティだ。

スース・フロイデンタールは，ペーターゼンの考えの中核にあるものを，こうして８つの項目にまとめた。そして，そこから，さらに，オランダのいえば関係者たちがまとめたのが，はじめに述べた20の原則はコア・クオリティだ。

８つのミニマムや 20 の原則，コア・クオリティは，イエナプランが「オープンモデル」であるということと関係がある。「オープンモデル」の意味は，それぞれのイエナプランスクールが置かれている異なる状況に合わせて，自分たちで工夫して学校教育を作っていくということだ。ただ，よく誤解されるのは，オープンモデルだから，なんでも良い，異年齢学級で，４つの基本活動を使っていれば，イエナプランと言って良いと考える向きがあることだ。しかし，そうではない。「オープン・モデル」の意味は，８つのミニマムや２０の原則，コアクオリティに書かれていることを理想の姿として，あくまでも，それを死守するように向上努力を続けなければならない，ということにある。これらに挙げられている目標は，決して容易に実現できるものではない。実現のためには，現在の学校の組織や，そこに関わる人々の態度や，その周辺にある様々な障害を排除したり乗り越える努力をしなければならない。そうした，環境条件は，個々の学校ごとに異なるので，戦い方も変わってくる。その時に，戦いを何のためにしなければならないか，それを示したのが，８つのミニマムであり，20 の原則であり，コア・クオリティであるのだ。単に壁にかけておけば良い「標語」とは違う。本気で死守しなければならないものだ。

詩，ポエムにもルールがある。ポエムは韻を踏まなければいけない。俳句もそうだ。5・7・5 で自分の感動を表現する。制限があるから，工夫の努力が生まれ，それがクリエイティブなアイデアを生み出すのだ。子供達のために，未来社会のために。

【まとめ】イエナプランに触れて，深く感動する人は多い。これまでも多くの若い人たちがイエナプランに惹かれ，オランダまでいえばを学びにやってきている。ただ，学校変革は dreamer だけではできない。つまり，理想を語る人間だけではできないということだ。理想を求める dreamer が教師になることは大切だ，しかし本当に学校を変革していくためには，dreamer である教師たちを守りながら，現実の仕組みの中で，地に足の付いたリーダーシップを取れるスクールリーダーの存在が求められる。「あなたのやりたいようにやって見てくれ！」という行政官と校長がいるかどうかが，学校変革の鍵であると思う。

【補足】

- リヒテルズ氏の講話は，マルチプルインテリジェンスを用いたグループ編成，数回のグループでの協議を加え３時間である。本年報の投稿規定に則り，当日のレジュメに従って，ポイントとなることを整理して編集した。また，文末を敬体から常体に修正している。文字起こしは院生が分担して行い，全体統括と記述を坂井，全体構成は若木が担当した。
- 当日の配布資料については，本資料の末尾に写真を除いたものを添付している。
- リヒテルズ氏は，講話の冒頭に「皆さん本当に今日学んだことが教員生活ずっと残るよう

な一言を持って帰ってほしいです。それは，一人一人違うのです。それは私から得るものではない。皆さんのなかから立ち上がるものです。」という発言をされた。それぞれの中に立ち上がってきたものについて，次の３つのステップ（課題となった『学習する学校』の一部を読むこと，事前読書会，当日の講話）を踏まえ，記述することにしている。そうした過程を踏まえることで，それぞれのビジョンが形成されるのではないかと思う。

・ 当日は，本学教員，本学教職大学院の教育実践力開発コースの院生と教員，岡山大学教職大学院の現職院生と教員，教育委員会，イエナプラン教育協会の関係者等，88 名が参加した。また，本会の後，本学教職大学院の教育実践力開発コースの院生と教員，岡山大学教職大学院の現職院生と教員合同で，別室での振り返りの場を１時間余りもったが，それも有意義であったことを付け加える。

【当日の配布資料】

これからの学校教育
今、あなたにできること

福岡教育大学
2018年11月８日
リヒテルズ直子

学びの基礎は
つながり感情に基づく安心感

みんなで遊ぶ、みんなで笑う

マルチプルインテリジェンス

自然スマート	自然が好きで自然について学ぶのが好き、動物が好き、庭仕事が好き、植物栽培が好き、天候の変化に左右されやすい、細かなことや物事の違いによく気づく、動植物への忍耐力がある、物事の関係性を見つけ分類するのが好き	音楽スマート	音楽やリズムを使って学ぶ、歌詞やメロディをよく記憶できる、音楽の才能がある、楽器が弾ける、韻のある詩や言葉が好き、音声や響きに敏感、音楽を聴くのが好き、歌を歌うのが好き
数学・論理スマート	秩序立てて考える、数が好き、分析が得意、難しい計算が好き、算数が得意、論理・秩序立て・構造などを考えるのが好き、物事を計画的に行う、因果関係や物事の順番に配慮する	人間関係スマート	他人と一緒に仕事をするのが好き、フィードバックを好み人の意見に左右されやすい、仲間のことをよく考える、他人に合わせるのは得意、チームプレーヤー、ムードや雰囲気に左右されや顔守恩、他の人に理解がある、コンフリクトの処理が上手い
言語スマート	言葉を通して学ぶのが得意、読むのが好き、言葉を使うのがうまい、人の話をよく聞ける、綴りや漢字が好き、自分の考えをうまく言葉にできる、語彙が抜い、言葉遊びが好き	運動スマート	体を動かして学ぶ、体を動かすことが好き、工作・ダンス・演劇・スポーツが好き、なんでも感じたり触れたい、自分で試したい、長く座ることは苦手、長い言葉での説明は苦手、落ち着きがないとよく言われる
空間スマート	ものをよく観察して学ぶ、生き生きとした想像力、目の前にないものを生き生きと思い浮かべられる、頭がにやってもらって理解する、イメージを長く記憶できる、物事の大づかみな関連がよくわかる、方角に強い、地図や図式をよく描く	内省・哲学スマート	批判的に考える、哲学が好き、他人の言葉を真に受けない、一人でいたり一人で仕事をするのが好き、自分自身より他の人の幸せをすべて発達する、存在の意味を考える、自分の行動や経験をよく省みる、物思いにふけっていることが多い

ピーター・センゲの論文

- 第１章６「産業化時代の教育システム」
- 第16章８「システム市民」

を読んで

ピーター・センゲがいう
「システム市民」って何？

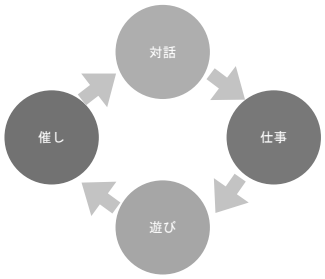
今日、
皆さんが学んで帰りたいと思っていることはなんですか？

急速に変化する世界で子どもたちが身につけるべきカとはなんでしょうか

まず自分一人で考えてメモ（２分）

近くの人と意見交換（３分）

リズミックな時間割



OECDとAsian Society による グローバル・コンピテンス

世界を探求する
自分の身の回りの環境を超えた世界に関心を持って探求する

異なる観点があることを認める
自分自身のものの見方、他者のものの見方を認める

考えを伝達する
自分のアイデアを多様な受け手に効果的に伝達する

アクションを起こす
自らのアイデアをより良い社会に向けて適切なアクションに翻訳する

４つの基本活動①
対話

仲間から学び、仲間とともに生きる

- サークルで
- ペアで
- 小グループで

- 平等な関係
- 自発的な発言
- 聞く力

イエナプランの基礎

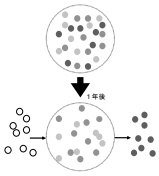
- 異年齢学級
- リズミックな時間割
- ４つの基本活動（対話・仕事・遊び・催し）
- ワールドオリエンテーション（グループワーク）

４つの基本活動②
仕事

学び成長し続けることへの責任

- 自立的な仕事
  自分で計画する、
  仕事に責任を持つ、
- 協働の仕事

異年齢学級



４つの基本活動③
遊び

遊びは学び

- 企図された遊び
  仲間づくり、グループ作り、
  気分転換、エナジャイザー、
  学んだ知識やスキルの応用
- 企図されない自由遊び
  企画力・戦略を立てる
  人間関係・感情

４つの基本活動④
催し

学校を共同体に
喜怒哀楽の共感
学びの成果を祝う

- 年間行事
- 各人（グループリーダーも）の誕生日など
- ミニ発表会
  全校で
  グループで

コア・クオリティ

イエナプランのハート
ワールドオリエンテーション
（グループワーク）

- ホンモノの出来事への関心を養う
- 物事のつながり・関係性・システムを学ぶ
- 答え探しでなく、問い続ける姿勢
- 科学（何かを証明するため）の手続き
- 協働による成果を生む経験

あなたは、

子ども一人ひとりの
個性を尊重するために、

具体的に、何をしていますか？

まず自分一人で考えてメモ（２分）　→　近くの人と意見交換（３分）

イエナプランの基礎を使うとグローバルコンピテンスをどこでどう実現できるでしょうか。

いまの日本の学校の中でもできそうなことが何かありますか。

もっとやりやすくするには学校や教室のあり方の、どこをどう変えると良いと思いますか。

どれか一つのテーマを選んで、考えてみてください。

異年齢グループ　時間割　対話　学習の形　人間形成の上での遊びの意義　催しのあり方　総合的な学習

あなたは、
複数の子どもたちが
協働によって成果を得る経験
の機会をどう作っていますか

まず自分一人で考えてメモ（２分）
↓
近くの人と意見交換（３分）

休憩15分

資料の中の２０の原則とコア・クオリティに目を通しておいてください

グローバル時代の地球市民

浮揚面　Draagvlak

子どもを学びの当事者にするために

しなければならないこと

しない方が良いと思うこと

変わらなければならないのは
教員
学校
そしてもちろん、
制度
多分、保護者も、、、

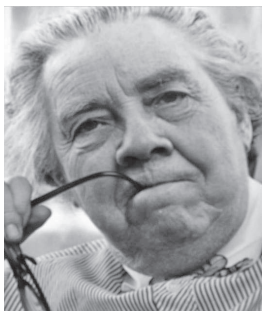
学校を
官僚的文化から
専門者集団的文化へ

チェックシートを埋めてみましょう

子どもが主体的に学び
学びの当事者
ownership
になるために

スース・フロイデンタール
イエナプラン ： ８つのミニマム

インクルーシブな考え方	学校を人間的で民主的な場に
対話の尊重	子育ての人間化
ホンモノ性	自由
批判的思考	クリエイティビティ



学びの当事者って？？？

あなたが
イエナプランスクールの
校長先生だったなら

どのようにしてこの８つのミニマム条件に取り組みますか？

資料の最後のページの欄を埋めてみてください
（テーマを一つだけ選んで）